

学ぶ意欲応援活動順調

戦後の混乱などの事情で、十分な教育を受けられなかった人たちが学ぶ自主夜間中学「旭川遠友塾」(代表・古野博明道教育大旭川校教授)。主に中高年の生徒が熱心に学ぶ中、会場が手狭なため、二年目の二〇〇九年度は旭川市内に別の教室を借りることが決まった。日本語の基礎を学ぶ外国人の参加も多いなど、活動は広がりを見せている。

(旭川報道部・五十嵐知彦)

札幌に自主夜間中学「札幌遠友塾」があるが、「札幌へは遠くて通えない」という高齢者も多く〇八年四月、旭川遠友塾が開設された。ボランティアスタッフは、現役教員や学生会員から約四十人。賛助会員からの会費など五十万円の年間予算に充

てている。初年度の受講生は二十七人で、旭川市内からの参加者が多い。十人九一八十四歳の二十人が在籍する第一学年は国語、数学、英語の三教科。内容は「一足し算・引き算」や「ABC」など。三学年を修了すれば卒業になる。

これとは別に、基礎的学習を繰り返す「じつくりコース」もある。在籍する七人は、いずれも仕事などで旭川へ来た外国人。「外国人の参加は想定外だった」(同塾)が、働きながら日本語を学ぶ施設が旭川に少ないことから、口コミで生徒た

ちが集まってきたようだ。現在、日本語の読み書きなどを、マンツーマンで習っている。初年度は順調に滑り出したが、課題もある。一年生はほとんどが一斉授業で、同塾は「きめ細かい指導ができません。理想は個々に合わせた指導」という。将来は

来はボランティアを二倍程度に増やし、生徒を支えたい考えだ。また、生徒の学習レベルにはらつきがあるため、同塾は「授業中



旭川遠友塾の生徒(左)と運営ボランティアがゲームなどを楽しんだ忘年会(昨年12月)

外国人も参加 課題はきめ細かい指導

に生徒が質問しやすい環境をつくるのが課題」という。生徒が自主的に企画した昨年の忘年会は、新聞紙を使ったゲームやピアノ演奏などで盛り上がった。古野代表は「忘年会のようなイベントが、生徒とスタッフの壁を取り払う環境づくりにつながる」と期待する。

現在は上川教育研修センターを利用して、新年度は新入生を含めて三教室が必要になり、旭川医療情報専門学校(市九の二)への移転が決まった。将来は生徒からの要望が多い「歴史」の授業も展開したいと考えて、

古野代表は「生徒の要望をくみ取りながら、学ぶ意欲を応援していきたい」と力を込める。

旭川遠友塾は〇九年度の生徒を募集している。希望者は教材費として月千円が必要。問い合わせは同塾の因幡さん ☎0166・579653へ。